

恢復期

堀辰雄

青空文庫

第一部

彼はすやすやと眠っているように見えた。——それは夜ふけの寝台車のなかであつた。……

突然、そういう彼が片目だけを無気味に開けた。

そうして自分の枕まくらもとの懐中時計を取ろうとして、しきりにその手を動かしている。しかしその手は鉄のように重いのだ。まだその片目を除いた他の器官には数時間前に飲んだ眠り薬が作用しているらしいのである。そこで彼はあきらめたようにその片目を

閉じてしまう。

が、しばらくすると、彼の手がひとりでに動き出した。さつきの命令がやつといまそれに達したかのように。そうしてそれがひとり枕もとの懐中時計を手捜りしてさぐっている。その動作が今度は逆に、彼自身ほとんど忘れかけていたさつきの命令を彼に思い出させる。

「まだ三時半だな……」

彼はそうつぶやくと、一つ咳せきをする。するとまた咳が出る。そうしてその咳はなかなか止やみそうもなくなる。まだ一時間ばかり早いけれども仕方がない。もう起きてしまおうと彼は思った。——彼は上衣うわぎに手をおすために身もだえするような恰かっこう好をする。

やつとそれを着てしまうと、半年近くも寝間着でばかり生活していた彼には、どうもそれが身体にうまく合わない。ネクタイの結び方がなんだかとても難かしい。靴を穿^はこうとすると、他人の間違えたのではないかと思う位だぶだぶだ。——そういう動作をしながら、彼はたえず咳をしている。そのうちにそれへ自分のではない咳がまじっているのに気がつく。どうも彼の真上の寝台の中でするらしい。おれの咳が伝染^{うつ}ったのかな。彼は何気なさそうに自分の足もとに揃^{そろ}えてある一組の婦人靴を目に入れる。

彼はやつと立上る。そうしてオキシフルの壇^{びん}を手にしたまま、ステイムで蒸されている息苦しい廊下のなかを歩きだす。靴^{かばん}にっまずいたり、靴をふんづけそうになる。一つの寝台からはスコツ

チの靴下をした義足らしいのが出ていて彼の邪魔をする。そんな
ごった返しのなかを、彼はよろよろ歩きながら、まるで狂人かな
んそのように眼を大きく見ひらいている。……

そのときふと彼は、そういう彼自身の痛ましい後姿を、さつき
から片目だけ開けたまんま、じつと睨にらみつけている別の彼自身に
気がついた。その彼はまだ寝台の中にあつて、ごたごたに積まれ
た上衣やネクタイや靴のなかに埋まりながら、そしてたえず咳を
しつづけているのであつた。

夜の明ける前、彼はS湖で下車した。

其^{そこ}処からまた、彼の目的地であるところの療養所のある高原ま
では自動車に乗らなければならなかった。途中で彼は、その湖畔
にある一つのみすぼらしいバラック小屋の前に車を止めさせた。
そこには、もと彼の家で下男をしていたことのある一人の老人が
住んでいた。その老人はもう七十位になっていた。そうしてもう
十何年というもの、この湖畔の小屋にまったく一人きりで暮して
いるのだった。ときどき神経痛のために半身不随になるといふこ
とを聞いていたが、そんな時は一人でどうするのだろうと、その
老衰した様子を見ながら彼は思った。「それにしても、何故こん
なにまでなりながら生きていなければならないのかしら？」そう
いう今の自分にはよく解^{わか}らないような疑問がふと彼の心を曇らせ

た。

そのバラック小屋の窓からは、古画のなかの聖母の青衣のような色をした、明けがたの湖水が、ほんのりと浮んで見えた。――

老人はいつか彼の前に古びた聖書を開いていた。そうして彼のために熱心な祈禱きとうをしだした。だが彼はそれには別に耳を貸そうともしないで、ただ不思議そうに、老人の手にしていた聖書の背革せがわが傷いたんでいると見えて一面に膏藥こうやくのようなものが貼はつてあるのや、その老人のぶるぶる顫ふるえている手つきが何となく鶏の足に似ているのを眺ながめていた。そしてその二つのものは聖書の文句よりも彼の心に触れた。まるで執拗しつような「生」そのものの象徴でもあるように。

療養所はS湖から数里離れたところのY岳の麓ふもとにあつた。

そうしてその麓のなだらかな勾こうばい配はいに沿うて、その赤い屋根をもつた大きな建物は互に並行した三つの病棟に分れていた。それにはそれぞれに「白樺しらかば」とか「竜胆りんどう」とか「石楠花しやくなげ」などと云う名前がついていた。彼の入つた「白樺」の病棟はY岳の麓にもつとも近く、そこには他の患者もあまり居ないらしく、そしてその裏側はすぐ一面の雑木林になつていた。彼の病室からはベッドに寝たままで、開け放した窓を丁度よい額縁なまがにして、南アルプスのまだ雪に掩おほわれているロマンチックな山頂なまがが眺められた。

彼の病室には南向きの露台が一つついていた。其処そこからならば
 S湖も見えるかも知れないと思つて、そこまで出て行つた彼はそ
 れらしい方向には一帯の松林をしか見出みいださなかつた。が、その代
 りに彼は其処から、下の方の病棟のあちらこちらの露台に裸かの
 患者たちが日光浴をしている有様を一目に見ることが出来た。み
 んな樹皮のような色の肌はだをしながら、海岸でのように愉たのしそうに
 腹はら這はいになつていた。

彼の想像はそういう人達と同じように日光浴をしている裸かの
 彼自身の姿を描いた。そして「わが骨はことごとく数うるばかり
 になりぬ」そんな文句を彼はふとつぶやいた。それはかの老人が
 彼のために読んでくれた聖書の中の一句だつた。いちばん何でも

ないような文句を覚えていたものと見える。「わが骨はことごとくか……」それはいつの間にか話し相手のない彼の口癖になってしまった。

夕方になると、彼はひどい疲労から小石のように眠りに落ちた。それから何時間たったのか覚えはなかったけれど、彼が目をさまして便所に行ったのは、だいぶ深夜らしかった。彼は便所から帰って、一種の臭いにおのただよっている病院の廊下を、同じような病室をN.O.1から一つずつ丁寧に数えて歩いて来ながら、さて彼の病室である四番目のやつのドアを開けようとして、ひよいと部屋の番号を見たら、それはN.O.5だった。彼は部屋の勘定を間違えたのだと思って、すぐ廊下を引き返した。が、ひとつ手前の部

屋に来て見るとそれは NO_3 になっていた。おれは何と寝呆けて
 いるのだらう。自分の部屋の前を何遍も素通りする。そう思つて
 また踵きびすを返した。が次の部屋まで来て見るとやっぱりさっきの NO_2
 O_5 であつた。まさかお伽ときばなし噺ばなしじゃあるまいし、おれが夜中に
 起きて便所へ行つている間におれの部屋が何処どこかへ消えて無くな
 ってしまったているなんて!……そうは思つたものの、彼はしばら
 くの間に、電燈ばかりこうこうと耀かがやいている深夜の廊下のまん中に
 愚かそうに立ちすくんでいたが、ふと其処にただよつている臭い
 が過酸化水素の臭いだと気づくが早い、彼は彼の部屋のドアの
 外側の把手とつてには、何故だか知らないけれど、ガアゼの繃ほうたい帯たいが巻
 いてあつたことを突然思い出した。そうして彼は、彼が何遍もそ

の前を往復したNO.5の部屋のドアの把手がその通りであることを認めた。おれはこのおれの手でさつきそれを握りながら今までこいつに気がつかなかつたとは何事だい！（そこで彼は思いきつてそのドアを押し開けた。）やっぱりおれの部屋だ。空からっぽのおれがおれを待っている。夕方、おれがそこら中に脱すぎ棄すてておいた外がい套とうや上衣じやういや襯しん衣いや、それから手袋や靴下のようなものまでが、みんなそれぞれにおれの姿を髣ほう髴ふつさせている。……

彼はやつとこさ自身のベッドにもぐり込みながら、今しがたの変な錯誤をゆつくりと考え直した。——つまり、病院にはNO.4なんて部屋は始めから無いのだ。4は不吉にも死と暗合するから。で、おれの部屋は四番目であるのだけれど、しかも5という番号

がつけられている。ただそれきりなのだ。……だが待てよ、その
 厄介な番号をもった部屋をすっかり持て余してしまつたこの病院
 の建築師は、ひよつとしたら一種の魔法のようなもので、この隣
 りのおれの部屋にそれをすぽつと嵌^はめておいたかも知れないぞ。
 そうしてその二重の部屋（つまりこのおれの部屋だが）、それは
 夢と現実とをくつつけたように、何処かですこしずつ喰^くい違いを
 生じている。そうだ、こんな夜ふけなどあの露台に出てこつそり
 窓の外からこつちを覗^{のぞ}いて見ると、丁度あの重屈折をする方解石
 のようなものを通して見たかのように、この部屋の中のものかす
 べて、そしておれ自身までがぼんやり二重になつて見えそうな気
 がする。

そのとき不意に前夜の寝台車の中のごたごたとした光景が彼に思い出された。いつまでも奇妙な半睡状態を続けている自分の身体からすうっと別の自分自身が抜け出して列車の廊下をうろろろと歩いている——そういう前夜の錯覚と、それから今しがたの変な錯誤とが何時いつしかごっちゃになって、なんだかうイリアム・ブレイクの絵の或る複雑な構図と同じような不可解さをもつて彼に迫りながら、ますます彼を眠りがたくさせた。

(二三日後の夜、彼は彼の部屋のドアの把手に人間の手みたいに巻いてあるガアゼの繃帯に内部から血のにじみ出ているのを認めた。しかし翌日になって見ると、彼の知らない間にそれは新しいガアゼに取換えられてあった。)

そういう神経質な最初の一夜を例外にすると、そこへ入院してからの彼の病状はずっと順調であつた。高原の春先きの氣候とともに。

彼の病室の窓から眺められる南アルプスの山頂には雪が日毎ひごとにまばらになつて行つた。そしてそれらは遂に何かしら地球の齒のようなものを剥むき出しながら、彼の窓に向つて次第に前進してくるように見えた。病人はそれを飽かずに眺めた。

だが、或る朝から急に雪が降りだした。そして一日じゆう小止おやみなく降つていた。もう四月下旬だというのに何と云うことであ

ろう。そしてそれはその翌日になつても、翌翌日になつても止まなかつた。

そんな或る夜ふけのこと、あたりがあまりに騒騒しくなつたのでそれまでうとうとと眠っていた彼は思わず目をさました。眠る前にいくらか小降りになつたかと思われた雪はいつしか吹雪ふぶきになつていた。その上に突風がそれに加つているらしい。——そんな夜も露台に向いているドアや窓は医師の命令で細目に開けておく習慣だつたので、それらの隙間すきまからは無数の細かい雪が突風そのものと一しよに吹き込んできて、そこら中に手あたり次第に汚点をつけながら、彼の病室の中をくるくると舞つていた。……彼はそつと眼だけを毛布のそとに出しながら夢心地ゆめごこちにそれを見入つ

ていたが、やがてそれらの活^{かつぱつ}澆に運動している微粒子の群はただ一様に白色のものばかりでなく、それらのなかには赤だの青だの黄だの紫だのがまじっていて、それらが全体として虹^{にじいろ}色になつて見えることに気がついた。その瞬間、彼はちよつと軽い眩暈^{めまい}を感じはしたが、それでもなおその回転する虹に見入つていると、それがいつしか彼に子供の頃の或る記憶を喚^よび起させた。……

人が子供の彼のために幻燈を映してくれようとしている。彼は闇^{やみ}の中をじつと見つめている。レンズがなかなか合わない。その間、たださまざまな色彩^{かたま}の塊りがぼんやり白い布の上にさまよつているばかりである。けれども或る期待のために子供は胸^{おど}を躍らせている。うっとりするような瞬間が過ぎる。やつとレンズが合

い、絵がはつきり見えだす。そこには雪のなかに一人の死んだ支那兵が倒れている。子供はその凄惨な光景に思わず目を掩つてしまう。……

その子供のおれを、一瞬間うつとりさせていたのと同じような現実の罨わなが今のおれを落とし入れようとしているのだろうか？ おれは何かに瞞だまされているのではないか？——そう思いながら彼はなおも魅せられたようにその虚空に回転する虹に見入っていたが、そのうち突然、何処かでガチャリ！ と硝子の破れる音がした。ガラスと同時にあちらでもこちらでもそれと同じような物音が起った。ずいぶん沢山の硝子が破れたらしいな……と思う間もなく、彼の耳は彼自身のすぐ身ぢかに起ったらしいそれよりも数倍も大きな

音響のために麻痺まひしたようになった。それは彼の部屋のなかで起つたものらしかったが、彼はそれを確めようともせず、頭からすつぱりと毛布をかぶってしまった。そして彼は枕もとに用意してあるヴェロナアルを飲もうとしたけれど、このまま何も知らずに眠ってしまったことも恐しかった。それからどのくらい時間がたったか分らなかった。——ただその間も彼はたえず自分の眼底に、さまざまの色の微粒子がちらちらしているのをば感じていたが、そのうち不意にエレヴェタアの下降に伴うような感じで彼の全身がすうとしだすのと同時にそれらの幻覚も一時に消えてしまった。それは明らかに眠りではなかった。それはどこかしら脳貧血に似ていた。

本当の眠りはただその発作を長びかせるような作用をした。

彼がそういう一種の仮死から蘇よみがえったのは翌朝の十時頃だった。

もう風はすっかり止やんでいたし、露台を四五寸埋めている雪からは水蒸気がさかんに立ちのぼっていた。そのせいばかりでなく、その露台の眺ちようぼう望は、いつも彼のベッドの上から見えるのとは非常に様子が異ちがっていた。そしてそれが、彼の病室の窓硝子が跡方もなく破壊されているからばかりでなしに、その露台に通じているドアがその蝶ちようつがい番ごとそっくり剥はぎとられてしまっているためであることに彼は漸つと気がついた。硝子の破れる音は彼もうつつに聞いて知っていたが、あんなに巖がんじょう畳じようだったドアがこんなまでに破壊し尽されたことを昨夜少しも知らずにいたことが

彼を気味わるがらせた。

南アルプスの山頂はまた一面に真白になりながら、いつの間にか彼の窓からずつと後へ退すきつていた。それを眺めながら、彼が自分のいま生きていることを確かめでもするように、彼のもじやもじやになった髪の毛へひよいと手を触れたら、その一本一本が神経そのものであるかのように痛んだ。

彼は眠ることが出来なくなった。

どうも夜中になると熱が出てくるらしい。ちよつと眠ったかと思ふとすぐ汗みどろになって目がさめた。朝の体温が三十八度位

で一日のうちの最高で、それから次第に下つて、夕方には最低三十七度位になった。熱の系統が普通とは逆であつた。しかもそれがかなり秩序立つていた。夜、眠れないのはどうもそのせいいらした。

毎晩、十二時頃になると看護婦たちが彼の病室に見舞いにきた。彼はからかい半分彼女たちのことを「鳩ぼつぽ」と呼んでいた。それは看護婦たちが鳩の歩き方を真似まねしているような恰好をして廊下を歩いてくるからだった。そうして看護婦たちは彼の病室のドアをすうつと音のしないように開け、しばらく室内の様子をうかがいながら闇のなかに彼が眠っているらしいのを確かめると、またすうつとドアを閉めて、再び鳩のような足どりで廊下を立去つ

た。看護婦たちのなかにはドアも開けずにその鍵かぎあな孔から彼の様子を覗いて行くものもあつた。そんな時刻にはいつもまだ眠れないでいるところの彼は、そういう看護婦たちの行動を一つ一つ手にとるように知ることが出来た。また、それまでうとうと眠っているような場合でも、きつとそのへんな凝視を彼は神経に感じて目をさましてしまうのが常であつた。そういうとき彼はびっしり汗をかいていた。彼は看護婦たちの立去るのを待つてすばやくタオルの寝間着を裏がえしにした。——だが、そのうちにその深夜の訪問は十二時に限らず行われるようになった。ずっとその時刻の過ぎた夜中の二時か三時になって、まだ眠れずにいる彼はドアがひとりでに開いたり閉じたりするのを見た。誰かが鍵孔から

じつと自分の様子をうかがっているのを感じた。しかもそれは一晚のうちに何回となく繰り返された。彼はその度毎たびごとにぞつとしながら、いつも眠った真似をしていた。そんな時彼の神経過敏になった耳は、どうかすると夜ふけの廊下に何かの翼の音のするのを聞いたりした。

しかし彼はその子供らしい恐怖を誰にも訴えなかつた。彼はその不眠と熱のためであるらしい幻聴に彼自身を馴ならそうとした。そして子供たちが「鳩ぼぼぼ」で遊ぶようにそれで遊ぶうとしていた。——だが或る朝、院長は、彼に彼が肋膜炎ろくまくえんを再発していることを告げた。そして彼が夜ふけの幻聴のように聞いていた何かの翼の音は彼自身の胸の中から起るものであることを知らされ

た。

彼は夜毎に不眠に馴れていった。彼はむしろ夜眠ることを欲しなくなった。眠ることは、彼には、ただ寝汗をかくことであつたし、そのあとで高い熱の、きつと出るような悪夢を見ることに過ぎなかつたから。だが彼は、不眠のまま、眼をあけたままで見えてしまう恐しい夢はどうすることも出来なかつた。……そんな或る夜に見たところの一つの夢であつた。いつもは開けておく筈はずの窓をどうしてだかその夜は閉めておいたと見える。そとは月夜らしく、その閉じた窓の隙間から差しこんでくる月光が彼のベッドのまわりの床の上に小さい円い斑ま点はんでんをいくつも描いていたが、それはまるで彼自身がそこへ無神経にしちらした痰たんのように見え

た。そういう変な光線のなかで、彼はふと彼の枕もとに誰かがうな垂^だれていてるらしいのに気づいた。ああ、Aが来てくれたな……

（その瞬間Aがだれか別の人間に変わってしまった）……おお、B
だったのか、すまないな、Aとまちがえて。……おや、君はBで
もないね、Cだったのかい……そんな風に、彼の枕もとにうな垂
れているのは一人の男きりだったが、その男が誰だかやつと見当
がつきそうになると、それはすぐ他の男に変わってしまった。相手
の男がいつのまにか他の男に変わっているようなことは、どんな夢
にもよくあることで、そういう不思議な変化も大概の夢ではきわ
めて自然に感じられるものである。それが彼のその時の夢ではそ
う行かなかつた。その不思議な変化がどこまでも不思議で、その

上それが一種の凄氣せいぎのようなものをさえ感じさせるのだった。：

：そんな具合に彼が彼の知っていると思われるあらゆる友人たちを代る代る夢に見つくしてしまった時分になつて、彼は漸つとその一見何でもないような、それでいてこの頃の彼の夢の中では、最も彼を苦しませたところの夢から自由にされた。熱がひどく出ているらしい。彼はそれを測るために検温器を取ろうとした。だが、その検温器は彼の手から滑すべつて床の上で真二つに折れてしまつた。その瞬間、いままで窓の隙間から差しこんでくる月影だつばかり思っていたそこら中の沢山の斑点が、突然、彼の目に真赤に映つた。そしてそれが本物の痰のように見えた。——おや、おれは何時の間にこんな血を吐いたのかしら？……彼は気味悪そう

にそれから目をそらしながら、なんだかこのまま自分が死んで行くのではないかという気がされてならなかった。そうして彼は、今しがた夢の中で彼を苦しませたところの友人たちが、彼の死を知らせる電報を手にしたまま、さまざまに驚愕きょうがくしている有様を、一つ一つ病的な好奇心をもつて描きはじめていた。……

彼がその何回目かの彼の「危機」から脱するためには、四週間たつぷりの絶対安静を要した。

六月に入ってから、或る日のこと、彼ははじめて露台に出るところを許された。彼は其処そこから見えるあらゆる樹木がすっかり若葉

を出しているのに眺め入りながら、目が痒くなるのを我慢していた。それらの樹木の多くが白樺しらかばと落葉松からまつであることを知ったのも殆どその時が始めてであった。

熱は体温表の上で一時非常にジクザクな線を描いたが、そのジクザクは次第にその振幅をちぢめて行きながら、遂に完全に赤線ついで（三十七度）以下になった。だが、彼の身体はまだ何処となく不安定だった。そしてひっきりなしに身体のうちらこちらに、丁度大地震のあとに起る無数の小さな余震のように、或は頭痛あるいが、或は神経痛が、或は歯痛が次ぎ次ぎに起った。彼はそれらの余震になおも怯おびやかさねながら、しかし次第に、露台のまわりでうるさいくらい嘖さえずりだした小鳥たちの口真似くちまねをしてみたり、裏の山から腕

いっばい花を抱かかえて帰つてくる看護婦に分けて貰もらつて薬くすり 罎びんに
さした竜胆りんどうや鈴蘭すずらんなどの小さな花の香かおりをかぎながら、彼は
生き生きとした呼吸をし出した。

或る日から彼も日光浴をすることになった。

彼は看護婦から紫外線除よけの黒眼鏡を受取ると、それをすぐに
掛けながら子供のようにいそいそと露台に出て行つた。そして彼
は初夏の太陽をまぶしそうに見上げながら、それに向つて話しか
けでもするように独語するのであつた。

「おお、太陽よ、おれも昨日までは苦痛を通して死ばかり見つめ
ていたけれども、今日からはひとつこの黒眼鏡を通してお前ばか
り見つめていてやるぞ！」

第二部

その後御病氣御順調の由、何よりも結構です。

もしお身体にお差障さしさわりないようでしたら当分こちらへ来て

みませんか。今年ことしは西洋人の別荘を借りています。私一人きり

ですからどうぞ御遠慮なくお出てください。うちの寢台はぎい

ぎい鳴りますけれど。庭には沢山あなたの好きな羊齒しだが生はえて

いますよ。(しかしこれはうちの撮とったのではありません。)

七月の初めに、軽井沢に行っている彼の叔母から、美しく密生

した羊齒ばかりを撮影した絵葉書が、まだ療養所にいる彼のところへ届いた。彼はすぐそれに返事を書いた。

絵ハガキを有難う。

僕はすぐにも叔母さんの「羊齒山荘」へ行きたいのですけれど、院長がまだ許してくれません。でもあと一週間位したら僕は院長と約束をしました。それまで僕はせつせと日光浴でもしていました。僕は足ばかり出しているものだから、なんだかマホガニイ製の義足でもしているようになりました。左様なら。

七月も末になつた或る朝、その「羊齒山莊」に突然、彼は、西洋人の好んで着るような派手な柄のスウエタアかなんぞ着込んで、妙にはしゃいだ姿をあらわした。手には籐とうのステツキを持つてゐるきりで、何処どこか散歩からでも帰つてきたような恰かつこう好であつた。——雜草おが生いかぶさるようになってゐる小徑こみちの両側には、とりわけ羊齒が見事に生長していたが、それが彼にはあたかも可愛らしい手をひろげて自分を歓迎している子供たちのように見えるらしく、彼を微笑ほほえませていた。……

その奥まつたヴェランダに、彼の叔母がひとりで籐椅子よに凭りかかっているのを認めると、

「叔母さん……」

そう彼は人なつこそうに元氣のいい声をかけた。

「……そうしているとところはまるで羊齒の女王みたいですわね」

「そう見えて？……女王なら、私は何の女王でもいいわ」叔母さんは彼になつこり笑つて見せた。

彼は靴のままヴェランダに上つて、そこにある籐椅子の一つにどつかり腰を下した。そうしてすこし荒い呼吸いきづかいをしていた。「お疲れになつたでしょう。すぐお寝やすみにならない？」

「ええ……叔父さんは？」

「ずっと東京よ……また瘦やせつぽちが二人寄つてたかつてきつと笑うことよ」

「ふ、ふ、僕もここへ来る途中で考えたんですがね……」

「……………」

「あのね、昔はそれでも、叔母さんと僕とで目方を合せると叔父さんのよりは五疋キロぐらい多かったです。でも、もう駄目だめなの。……僕はあの頃から見ると五疋はたっぷり減ってしまったからなあ」

「そのかわり、叔母さんはすこし肥ふとったでしょう?……」

そう言われても、彼はもう叔母さんの方を見ようともしないで、元気なくじっと目をつぶっていた。……

その羊齒の密生している叔母の別荘には、去年まではスコット

ランド人らしい老夫婦がいかにも品よさそうに暮していた。毎年の夏、彼は散歩の折などこのへんの草深い小径が好きでよくこの家の前を通ったものだが、その度たびごと毎にいつもその老夫婦がヴェランダに出て黙ったまま、お茶かなんか飲み合っているのを見かけたものだった。なんでも三十年近く日本で宣教師をしている人だそうだが、そんな宣教師というよりも寧ろむし哲学者かなんかのように見える。この高原のどんな小径にでも勝手な名前をつけたがる西洋人に倣ならって、彼もこのへんの小径を自分勝手に *Philosophe* *ロ*《フィロゾフエン》 *Weg* 《ウエグ》 と呼んでいたくらいだったのに。……あの老夫婦もとうとう彼等の任期を了おえて故国にでも帰ったのかしら。——そう云えば、この老夫婦が他のアメリカ亜米利加の

宣教師たちと異つて、いかにも趣味のいい、そして地味な暮し方をしていたらしいのは、彼等が彼等に代つてこの別荘に入るであろう人達のために残して行つた幾つかの古びた家具類、——例えたとば大きな寝台とか、がっしりした食卓とか、稚拙な彫りのある椅子などを見れば分かる。どれもこれも三十年ぐらひはごく注意して、傷一つつけずに、使い通してきたものらしい。たとえ異国であらうとも、こんな風にごく上等な品物をごく長い間使い慣らしていた老人たちの心柄は、ただ質素であると云つてしまうにはあまり奥床しく思われる。——彼はそれらの家具類の間にちよこんとしてゐる一つのごく小さな椅子に、丁度五六歳の子供にしか掛けられないような一つの椅子にふと眼を止めた。その小さな椅子

は木質の古びと云い、それに彫られてある模様の稚拙な感じと云い、いずれも他の古椅子とあまり変らなかつた。これはひよつとすると彼等が三十年前スコットランドから日本へ移住して来た時他の家具類と一緒に向うから持ってきた物かも知れない。そのとき彼等には丁度五つか六つぐらいになる子供が一人あつたのだらう……だが彼はこれまでついぞそういう彼等の息子らしいものを見かけたことは無かつたけれど……その息子、と云つても今ではもう三十以上になつてゐるに違いないが、彼は自分の職業のため一人で故国に歸つていたのだらうか、それとももしかしたらもう死んでしまつてゐるのであるまいか？……いずれにせよ、この可憐な椅子かれんがそれを見る度毎に彼等老夫婦の心を慰めていたであ

ろうことは容易に想像される。そうしてこの別荘を立去る時、その老夫婦はこの椅子一つのためにどんなに心をなやましたことであらうか？

……それらの古びたいくつかの家具がしめやかに語りだすところの、そう云うロマンチックな物語に耳を傾けながら、それらの語り手の一人である、すこし彼には大き過ぎる寝台の上に、到底眠れそうもないと思いつながら横になっているうちに、彼はいつしかすやすやと寝入った。……

夕飯のときである。彼は叔母と一しよに食堂の、それひとつあ

れば七八人ぐらいのお客には充分間に合いそうな、大きな円卓まるテーエ子ブルにつこうとして、さして、それがあんまり大き過ぎるので、何処へ坐つたらいいのかまごまごした。

「どうも具合が変だなあ……」

「すこし遠くても、向い合つて坐つた方がよくつてよ。……でも、二人になつたから、これでもまだ恰好がつくのよ。私一人のときは、ほんとうに持て余してしまつた……」

彼は彼女の云うとおりに彼女と差し向いに坐つた。しかし、卓子の向側とこちら側で話し合うには、よほど大きな声を出さなければ聞えないような気がした。そこで彼は食事の間だけ沈黙することにした。そのかわりに彼は食事をしながら、その食卓掛けの

よく洗濯せんたくしてあるけれど色がひどく剥はげちよろになつてい
や、アルミニウムの珈琲コオフィイワカ沸わかしの古くて立派だけれどその手が
とれかかっていると見えて不細工に針金でまいてあるのや、どれ
もこれもちぐはぐな小皿に西洋草花が無邪気に描かれてあるのや
を一々丁寧に眺ながめまわしていた。これらの物もみんな前の老夫婦
が置いていったものらしい。……

そのとき彼は、例の子供の椅子に関する彼の意見を叔母に話し
たい欲望を感じた。探偵小説ばかりを読んでいるせいか、他人の
身の上などを空想することの好きな叔母はことによると彼よりも
っと細かな観察をしているかも知れない。彼はしかしそれを言う
のを止やめた。彼には卓子の向側にいる叔母に向つて普通より大き

な声で話しかけなければならぬのが物憂かつたのだ。

一種の神経衰弱に罹^{かか}つたところの病人は、二日も三日も平気で眠りつづけると言われる。数年前、彼はその軽いやつに罹つたことがあつた。——その時の症状が思い出されてならないほど、この頃の彼はひつきりなしに眠たい。すこし我慢して起きていると眠気で床の上に倒れそうになる。病院での睡眠不足を一時に取戻そうとするがごとくに彼は眠りつづける。その病院では看護婦たちに持て余されたくらい神経質になつた彼は、ここでは——このしつとりした落着きのある山荘のなかでは、そうして彼の叔母の

クラシツクな愛のなかでは、彼はまるで母親に抱かれた子供のよう
に前後を知らず深い眠りに落ちた。事実、彼はここへ来てから
もう何日になるのか、十日になるのか、二十日になるのか、それ
とも一週間にしかならないのか、それすら思い出せない。そうし
て昨日のことが一昨日のことより昔のように思える。

叔母のところへは毎日のように彼女と同年輩ぐらいの女の客が
訪れてきた。そういう女客ばかりが二三人一しよに落ち合うよう
なこともあった。「みんな私の学校友達なのよ」叔母はそう言っ
ていたが、いずれ叔母に聞いてみればそれぞれゆいしよ由緒のある貴夫
人たちなのであろうけれど、そういう貴夫人たちというものはど
んな会話をするものかしらと、一度二階の彼の寢室からじつと耳

を傾けて聞いてみると、自分の別荘の裏の胡桃くるみの木に栗鼠りすが出たとか、野菜がどうだとか、薪まきがどうだとか、そんな話ばかりしているのだから彼はひとり苦笑した。

そういう時には、彼は誰にも見つからないように、二階から降りてこつそりと台所の裏へ出て行った。そこには落葉松が繁茂していて涼しい緑蔭をつくっていた。彼はいつもそこへ籐の寝椅子を持ち出してごろりと横になった。其処そこからはよく伸びた落葉松のおかげで太陽がまるで湖水の底にあるように見えた。どうかすると彼はそこでそのまま眠ってしまうこともあった。

そんな日のある日、もう客が帰った跡と見えて、その裏庭に面したフレンチ・ドアに叔母がぼんやり凭りかかっているのを見つ

けると、

「叔母さん」

と彼はその寝椅子の中から声をかけた。

「ここにこうしていますとね、僕はきつとドロシイのことを思い出すんですよ……どうしてかしら？」

叔母さんはまだぼんやりしている。よほどお疲れになったと見える。

「ドロシイは今年は来ていませんかの？」彼はうるさく質問するのである。

「ドロシイさんの家は何でも去年カナダへお帰りになったそうよ」
「そうですか。——おや、おや、僕は年頃のドロシイが見たかつ

たんだがなあ……」

……数年前、彼はそのドロシイの隣りの別荘に一夏を暮したことがあつた。やはり叔母と一しよに。——その頃ドロシイはまだ七つか八つ位であつた。彼はときどきそのドロシイや彼女の小さな妹たちと一しよになつて遊んだ。ドロシイは綺麗な女きれいなの子で彼女の美しい名前によく似合つていた。日本語も上手だつた。しかし彼と話をしているうちに日本語が分らなくなると英語でしゃべつた。そうして英語などで人としゃべつたことのない彼を一ちよつと寸黙らせた。そういう時いつまでも彼が黙っていると、彼女は何だ

か困ったような真面目な表情で彼を見上げるのであった。彼はそういう表情を美しいと思った。——或時、彼はドロシイとその小さな妹とを連れて、オルガン岩のほとりへ散歩に行った。その散歩の間、ドロシイは絶えずはしゃいでいたが、その帰途、突然一つの小さな崖がけの上へよじのぼってしまった。それは彼女によじのぼることはどうにか出来ても、そこから下りてくることは危険に思われるほどの急な傾斜だった。どうするだろうと思つて見てみると、ドロシイはちよつとその傾斜を見て首をかしげていたが、いきなりそこを駈かけ下りてきた。あぶない！ と彼が叫ぶのと殆ど同時に、彼女は途中で足を滑すべらしながら、彼の足許あしもとへもんどり打つて落ちてきた。……しかし彼女はすぐ起き上つた。見ると

彼女の白い脛はぎには泥がつき、何かで傷つけたらしく血が滲にじんでいた。彼女はしかしそれを見ても泣かずにいた。ともかくもすぐそのホテルまで連れて行って何とかしてやろうと思いつながら、その怪我けがをした少女とそれからもう歩き疲れているらしいその妹とを二人、両手に引張つてホテルに向つて歩いてゆく彼の方がよほど気が気でなかった。そのうち彼はこりや俺おれの方がすこしあやしいぞと思ひ出した。……彼はどうかした機会に、血を見ると、それが自分のであらうと、他人のであらうと、すぐ脳貧血を起してしまふ癖があつた。そうして今も今、彼はドロシイの白い脛に薔ば薇色らいらろの血が滲み出ているのを見ているうちに、どうやらそいつを起したらしいのである。彼はホテルの玄関の次第に近づいてくる

のを、うるさく顔にまつわりつく蜘蛛くもの巣のようなものを透して、
やつとのことで見分けていた。……

「ブランデー！ ブランデー！」

一人の西洋人がそう叫んでいるらしいのを彼はすぐ顔の近くに
聞いた。それから彼は、自分がホテルの床板の上にあおむけに倒
れながら、誰かに自分の足を宙に持ち上げられているらしいこと
に気がついた。それと同時に甘ったるいような香水のかおりを彼
は臭かいだ。彼を介抱してくれているのは西洋人の夫婦らしかった。
「ブランデー！」

彼の足を持ち上げていてくれるその西洋人は、漸ようやく意識を回復
しだした彼の上にかがみながら、ボオイの持つてきたらしい琥こはく

琥珀色いろうのグラスを彼の唇くちびるに押しあてた。彼はそれを一息に飲み干した。

「……………?」

彼はその親切な西洋人たちにどんな言葉で感謝を示したらいいのか分らなかつたので、ただにつこりと笑つて見せた。

その時彼の額へ手をやっていたその細君らしい西洋婦人がひよいとうしろを振り向いたので、その方へやつと頭を持ち上げながら彼も見てみると、ホテルのポオチのところところにドロシイとその妹は、丁度ホテルへ遊びにでも来ていたと見える彼女らの友達らしい五六人の少女たちに取りかこまれていた。そうして一種の遊戯かなんぞをしているように、ドロシイの説明を聞こうとしていく

つもの金髪をひとところに集めているそれらの少女たちの姿は、
まだすこし頭の痺しびれている彼には、あたかも葡萄ぶどうの房ふさぎのようにゆ
らゆらと揺れながら見えた。……

……ここにこうして居ると、そういう数年前の光景の一つ一つ
が、妙に生き生きと彼の心のなかに蘇よみがえってくるのは、どういう訣わけ
かしらと考える度毎に、彼はこの樹蔭こかげに何かしら一種特別な空気
のあることに気づかないではなかったけれど、つい面倒くさいの
で彼はそれをそのままにしておいた。だが、或る日のこと、いく
らか気分よかった彼はその原因を調べてやろうと思ひ立った。

その樹蔭は奥へ行けば行くほど彼が名前も知らないような雑草が茂るがままに茂っていた。これはきつとこの雑草の中に何か特別なかお香りを発するものがあつて、それが彼の記憶を刺戟しげきするのかも知れないぞと思つた。そこで彼はこの雑草のなかを鼻孔をひろげながら出たらめに歩き廻つてみた。なるほど、何かが特に強く匂におつている。——それを嗅いでいると、なんだか氣持がすうすうしてくる。おや、おれはまた腦貧血をやりそうだぞ、と彼がちよつと錯覚を起しかかつたくらい、その香りは彼の発作の直前の氣持を思い出させる。こいつだな、と思つて彼はその香りをたよりに、その香りの生じていそうなところをむきになつて捜したけれど、それが一面に茂っている雑草のどの辺であるのかすら一向に

見分けがつかなかった。だが、その香りは何処かしらからますます鮮明に匂ってくる。彼はそこにぼんやり佇たたずんだまま、何となく自分が盲目になったような感じさえ持ち出した。……

だが、彼は遂ついにその香りの正体を捜しあてた。彼の足が偶然にもそれを踏んづけたのである。彼の足もとには、暗緑色の細かい葉をもった草が一かたまりになって密生していた。その一つを手折って見ると、その葉は縮ちりめん緬しわの皺しわのようにちぢれていて、それが目にしみるほどの強烈な光りを放っていた。何かの匂いに似ていると思っただけで、どうしてもそれが思い出せなかった。彼はそれを叔母のところへ持って行った。

「叔母さん、これ、何という草だか知っていませんか？　これです

よ、僕にドロシイのことを思い出させるのは……」彼は二三年前の発作のことを思い出しながら言った。

叔母はそれを手にとつて見てちよつと嗅いでいた。

「なんだか薄荷はっかみたいな香りがするわね。薄荷草というのじゃないこと？」

「あ、そう、そう、こりあ薄荷のにおいでしたね……」

彼が発作を起すときの何となく快よいような気持は、丁度このにおいを嗅いでいるときの気持にそっくりであることに彼はいま始めて気がついたのである。それは彼には一つのすばらしい発見のように思われた。

まだ八月の半ばを過ぎたばかりなのに、もう秋風らしいもの
周囲の木の葉をさわさわ揺すぶっているのを耳にひやりと聞きな
がら、或る朝、彼が二階のベッドの中でいつまでもぐずぐずして
いると、突然戸外でマグネシウムを焚たいたような爆音がした。そ
れと同時に家全体がはげしく動揺した。

「浅間山よ……早く来てごらんさいよ」階下のヴェランダで叔
母が叫んでいるらしかった。

彼は寝間着の上に上着をひっかけてヴェランダへ降りて行った。
「僕はまた写真屋がマグネシウムでも焚いたのかと思った。それ
にしては朝っぱらから変だと思っただけだ……」

なるほどヴェランダからは、浅間山がその花キャベツに似た噴

煙をむくむくと持ち上げている何とも云えず無気味な光景がはつきりと見えた。その無気味な煙りの中には、ときどき稲妻いなづまのようなものが光っていた。その閃光せんこうは熔岩ようがんと熔岩とがぶつかつて発するものだということを、去年の夏、彼は人から聞いていた。彼はその凄じすさまい噴煙を見上げながら、丁度今の自分と同じようにそれを見上げていた去年の夏のまだいかにも健康そうだった自分の姿をひよつくり思い浮べた。そうしてそれに比較すると、今の自分の方がかえって夢の中にもいるような気がしてならなかった。……

もうヴェランダはうすら寒かった。

彼は客間には行って行きながら、こんな朝はもう煖炉だんろを使うの

も悪くはないなと思つた。彼はこの別荘に来た時から、その客間の片隅かたすみに古い熔岩を組み合せてこしらえられてある山家らしい煖炉に目をつけ、それを一度使つてみたいと始終思つていたのである。それで、その朝、とうとう彼は女中に言いつけて松の枝をどつさり持つて来させた。そうして自分で煖炉の前にしやがみ込みながら、それを焚きつけにかかつた。

やっとその小枝に火が燃え移つて、ぱちぱちとそれが快活な音を立て出すと、叔母も自分の椅子をその火のそばに近づけた。

「そうしているところは、あなたも随分丈夫そうになつてね」叔母が言つた

「そうですか。——でも、もうかれこれ一年になるんですからね

……ねえ、叔母さん、僕ね、去年二回喀^{かっけつ}血したでしょう。……
 最初の時は、どういうもんだか気持がよかつたくらいでしたよ。
 そりや何しろ生れて始めてなので、びっくりしたことはびっくり
 したけれど、もうこのまま死んで行くのだと思つたら、かえつて
 落着いてしまったのでしようね。……だけど、二度目のときはほ
 んとに厭^{いや}だつたなあ。——あの時はもう、ひよつとしたら助かる
 かも知れないという気がしていたもんだから、かえつて慌^{あわ}ててし
 まつて、僕は無理矢理に咽喉^{のど}から上げてくる血を半分ばかり飲み
 込んでしまつたんだからなあ。そのあとの気持の悪いつたらなか
 ったし、医老には叱^{しか}られるし……僕はあの時くらい人間の生きよ
 うとする意志を醜^{みにく}く思つたことはないなあ……」彼は何時^{いつ}かひと

りごとのように言いつづけていた。が、ふと彼のそばに叔母が何だか煙ったそうな顔をしているのに気づくと、彼は強^しいて口をつぐんだ。そうして一本のくすぶっている小枝をいじくっていたが、その様子には何処^{どこ}か言いたいことがどうしても言えないでそれをもどかしそうにしているようなところがあった。恐らく彼は叔母に向つてこう言いたかつたのかも知れない。……

「叔母さん、そんなに僕が生きていればいいと思いませんか？」……

……
そうして二人はそのまましばらく黙っていた。

そのうちにさつと何か木葉の上に降ってくる音がし出した。それは乾^{かわ}いた雨のような音だった。

「浅間の灰かな？……」
叔母はそうつぶやくと、そっと立上って
窓ぎわへ寄って行つた。

青空文庫情報

底本：「燃ゆる頬・聖家族」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月30日発行

1970（昭和45）年3月30日26刷改版

1987（昭和62）年10月20日51刷

初出：「改造」

1931（昭和6）年12月号

初収単行本：「ルウベンスの偽畫」江川書房

1933（昭和8）年2月1日

※初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）

年5月28日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

恢復期

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>